

【特集】他者との出会い、他者の現れ

小田切 祐詞・鈴木 智之

本特集の目的は、「他者との出会い」「他者の現れ」という観点から「コミュニケーション以前の社会関係」を再考することにある。

ここで言われる「コミュニケーション以前の社会関係」とは、アルフレッド・シュッツが彼の音楽論の中で用いた表現を指している (Schütz, 1964=1991: 224)。よく知られているように、シュッツはコミュニケーションとの関係で二つの社会性を区別していた。一つはコミュニケーションによって構成される社会性、もう一つはコミュニケーションそれ自身が前提としている社会性である (Schütz, 1976=1998: 83; 李 1998: 176)。ここでシュッツが想定しているコミュニケーションとは基本的に言語的相互作用——シュッツ自身の言葉を借りれば「概念的な言葉で意味の伝達をするコミュニケーション」 (Schütz, 1964=1991: 241) ——として理解できるものだが、後者の社会性をシュッツがその音楽論の中で「コミュニケーション以前の社会関係」と呼び、それを「相互に波長を合わせる関係」と定式化したことは、これまで多くの先行研究で指摘されてきた通りである¹ (Schütz, 1964=1991; 西原 1998, 2003; 松尾 2011)。

シュッツは「相互に波長を合わせる関係」が明確な形を取って現れる現象として「共に音楽を創造する」「一緒にダンスをする」「互いに恋し合う」「共に行進をする」などを挙げているが (Schütz, 1964=1991: 224)、「われわれ」経験を基礎とするこの種の関係から出発する研究は、どちらかと言うと自他関係が安定的に成立している場面からその基礎を解き明かそうとする傾向があったように思われる²。それに対して、近年看護や医療ケアの現場を中心に展開している臨床現象学は、それとは異なる視角から、コミュニケーションの土台となる基底的关系にアプローチしているように見える。ここで念頭に置かれているのは、たとえば、モーリス・メルロ＝ポンティの身体論を手がかりにしながら、医学的には他者と関係することが不可能と定義される植物状態患者と看護師との微細なやり取りを記述した西村ユミの研究 (西村 2018)、あるいは、目が合わないもしくは呼んでも気づかないような自閉度の強い子どもを事例にしながら、対人関係の基底次元に「視線触発」の存在を見出した

¹ この点について、たとえば西原和久は次のように述べている。「言語を用いる相互行為 (コミュニケーション) の手前にある、あるいはそのより基底にある〈概念図式とは結合していない〉音楽のコンテクストを引き合いに出しながら、〈いかなる種類のコミュニケーションにも含まれている非概念的な局面〉である〈コミュニケーション以前の社会関係〉といったいわば生きられる前社会性を、シュッツは〈相互に波長を合わせる関係 (相互同調関係)〉として示し、その経験が〈あらゆる可能なコミュニケーションの基盤にある〉とした」 (西原 1998: 78)。

² 「相互に波長を合わせる関係」を音楽との関わりで論じたものとして寺前典子の議論を参照のこと (寺前 2018)。ダンスとの関わりについては松尾信明の議論を参照のこと (松尾 2008)。「互いに恋し合う」については、それを「エロス・共感の問題圏」として定式化した西原の議論を参照のこと (西原 2003)。また、西原は音楽の共同創造過程についても集中的に取り上げており、それを「リズム・共振の問題圏」と定式化している。

村上靖彦の研究などである³（村上 2008）。

これらの研究に共通する視角として、おそらく次の二点を指摘することができる。一つは、自他関係の成立がむしろ不確かな場面からその基層を問い直すという視角。もう一つは、一つの視角と相関するものであるが、「物理的に近接しているからといってその存在がいつも〈他者〉として現れ、その存在と有意な関係を取り結ぶことができるわけではない」、あるいは、「自他の基底的关系の成立には、物理的次元に還元されない意味を帯びた〈他者〉との出会いが必要である」という視角である⁴。

後者の「他者の現れ」や「他者との出会い」という論点は、ケアというフィールドでしか意味を持たないというわけではおそくない。「ロボットは他者になりうるか」という問いに現象学的な視点からアプローチした小嶋秀樹・長滝祥司の論考「ロボットが／に心を感じる時——現象学とロボティクス」は、同様の視角から行われた現象学的研究の一つとして挙げることができるであろうし（小嶋・長滝 2004）、現象学という学問領域の外に目を向ければ、たとえば、宇宙人との出会いを手がかりにしてコミュニケーションの成立条件に迫った木村大治の著作『見知らぬものと出会う——ファースト・コンタクトの相互行為論』のような人類学的研究を見つけることもできる（木村 2018）。そして何より、コロナ禍により様々な場面（会議、授業、診療、飲み会など）で「リモート化」が進み、相手の存在感を強く感じられないまま——他者と出会い損ねたまま——意思疎通を図らなければならない機会が増えている今だからこそ、この論点はケアに限定されないより広い文脈で問われるべきものとなっているように思われる。

このような問題関心から、2022年12月11日に日本現象学・社会科学会第39回大会シンポジウム「他者との出会い、他者の現れ」がオンライン（Zoom）形式で開催された。提題者として社会学の分野から高橋賢次氏と澤田唯人氏を、看護学の分野から田中雅美氏をお迎えし、それぞれご報告を頂いた。また、コメンテーターとして哲学の分野から吉永和加氏をお招きし、的確かつ共感溢れるコメントを頂いた。コメントに対する提題者からのリプライがなされたあと、フロアを交えて活発な議論が行われた。本特集は当日の議論をもとにお寄せ下さったご論考を編んだものである。

提題者の高橋賢次、澤田唯人、田中雅美の三氏およびコメンテーターを務めて下さった吉永和加氏に、シンポジウム企画者として改めて感謝するとともに、貴重なご論考をお寄せ下さったことに心から御礼を申し上げたい。

³ さらに、ALSを患い、文字盤を使ったコミュニケーションすらできなくなった母親との意思疎通の可能性を描いた川口有美子の著作も、厳密に現象学的手続きが採られているわけではないとはいえ、西村と村上の研究と同様、後述する二つの視角をもつ研究と見なすことができる（川口 2009）。

⁴ 村上も別の著作で、ケアにおけるコミュニケーションを可能にするものとして〈出会いの場〉という概念を提示している。これは、物理的な三次元空間で並列されるモノ同士が衝突する場ではなく、〈からだ〉と〈からだ〉が触発し合い、互いに何らかのサインを受け取る場とされる（村上 2021：9）。

文献

- 李晟台、1998、「他者と他者性——他者経験の文脈」、西原和久・張江洋直・井出裕久・佐野正彦編『現象学的社会学は何を問うのか』勁草書房、167-188.
- 川口有美子、2009、『逝かない身体——ALS的日常生活を生きる』医学書院.
- 木村大治、2018、『見知らぬものと出会う——ファースト・コンタクトの相互行為論』東京大学出版会.
- 小嶋秀樹・長滝祥司、2004、「ロボットが／に心を感じる時——現象学とロボティクス」、長滝祥司編『現象学と二十一世紀の知』ナカニシヤ出版、108-136.
- 松尾信明、2008、「社会学とスポーツ——ダンスを対象として浮上する『身体化』概念の意義」、『社会学史研究』30: 157-70.
- 、2011、「『相互に同調する関係』と身体論」、『社会学評論』61(4): 473-488.
- 村上靖彦、2008、『自閉症の現象学』勁草書房.
- 、2021、『ケアとは何か——看護・福祉で大事なこと』中公新書.
- 西原和久、1998、『意味の社会学——現象学的社会学の冒険』弘文堂.
- 、2003、『自己と社会——現象学の世界理論と〈発生社会学〉』新泉社.
- 西村ユミ、2018、『語りかける身体——看護ケアの現象学』講談社学術文庫.
- Schütz, Alfred, 1964, *Collected Papers II: Studies in Social Theory*, Martinus Nijhoff: The Hague. (渡部光・那須壽・西原和久訳、1991、『アルフレッド・シュッツ著作集 第3巻 社会学理論の研究』マルジュ社).
- 、1976, *Collected Papers III: Studies in Phenomenological Philosophy*, Martinus Nijhoff: The Hague. (渡部光・那須壽・西原和久訳、1998、『アルフレッド・シュッツ著作集 第4巻 現象学的哲学の研究』マルジュ社).
- 寺前典子、2018、『リズム(身体感覚)からの逃走——音楽の現象学的・歴史社会学的研究』晃洋書房.

(おだぎりゆうじ・神奈川工科大学)

(すずきともゆき・法政大学)

